



敬うこととおそれること

私たちは先輩方から「先祖を敬え」という言葉を聞いてきています。そのことにうなずきながら、そして大切なこととして生きてきていますが、でも敬うということはどんなことなののでしょうか。

私たちは恐れることと敬うことを混同しているのではないかと私は思うのです。別の言い方をすれば恐れることと敬うことは全く違うものではないかと私は考えています。私たちは先祖に対して敬うということよりもおそれの気持ちの方が強いのではないだろうか。恐れているから敬うことにしているのではないのでしょうか。

敬う、尊敬するということは頭を下げることでなくて、頭が下がることです。自分の行動として頭を下げるのではな

く、理由もなく、無条件に頭が下がること、絶対的信頼があることを尊敬というのだと私は思います。

私たちはどうでしょうか。先祖に対して絶対的信頼が成り立っているのでしょうか。どちらかといえば崇^{たた}りをもたらすもととして、災^{わざわ}いを運んでくる根元としてみているのではないのでしょうか。そしてそういうことが自分たちのところに起きないために敬う形（法事・墓参り）を一応取っているだけなのではないのでしょうか。

先祖は敬わなければならないのではなく、敬ってしまうものなのです。お念仏が私にとってかけがえのない宝としていただけたとき、念仏を私にまで伝えてくださった尊い方々として敬っていけるものなのです。私が今生きていること、生命を頂いていることがめでたく、有り難いことと頂けたときあらゆる存在に対していつの間にか尊敬していけるのではないのでしょうか。

強制するものではありません。





あい 愛

「愛」難しい言葉である。

われわれは、愛を絶対・至高のものと考えがちである。

キリストは「^{なんじ}汝の隣人を愛せ」と言い、孔子の説いた「仁」もまた愛であり、テレビは「愛は地球を救う」と叫ぶ。しかし、彼らと違って、釈尊は愛は苦だと説き、悟りへの障碍物と教える。

釈尊は、妻をすて、子をすて、家をすてて出家の道に身を投じた。それはまた愛を切りすてることでもあった。愛は深ければ深いほど、切りすてる時の苦悩もより強い。その強い苦悩を知っているからこそ釈尊は愛を苦ととらえたとも考えられる。

また愛という言葉自体は本来すばらしい言葉ではあるのだが、われわれ凡夫の愛の裏側には、常に区別の思いが隠れている。わが子を愛する心の裏には、わが子とよその子を区別する心があるように、何かを愛するという心の裏には、別の何かは愛さないという心が潜んでいる。愛国心という言葉が時として危険性をはらむのはこのためでもある。そしてこの区別する心は、すぐに区別したものに対する執着の心を生み出す。この執着を背景に持つ愛は、単なる己の欲望充足のための愛である。

そもそも仏教でいう愛とは、トリシュナーの訳語で、欲望の充足を求める「^{かつあい}渴愛」をいう言葉である。こういう凡夫の愛こそが悟りへの障害でもあり、^{えんがくきょう}円覚経という經典にいう「^{りんね}輪廻は愛を根本と為す」の愛なのである。輪廻を脱するために、言いかえるなら、^{げだつ}解脱のためには障碍となるような愛、釈尊自身こうした凡夫の愛を切りすてることによって、より大きな深い愛へ近づこうとしたのかもしれない。

たとえば飢えた獣の前に我が身を投げ出したという、^{ほんじょうたん}本生譚に語られる愛。けして自己の欲望充足のためではなく、生きとし生けるものに広く等しくそそがれる絶対平等、無差別の愛、「仏の慈悲」と名づけられたこの愛こそが、釈尊が求めた愛であったのだろう。

また善人のみならず悪人にこそ往生の可能性があると説いたわが親鸞の、その背景にある「愛」も、この愛であったように思われてならない。

(佐藤義寛 大谷大学助教授・中国文学大谷大学発行『学苑余話』生活の中の仏教用語より)

2003 ねん 5 がつ 1 にち

法座の予告

会 經 堂 祠

6月29日（日）より30日（月）まで

布教師 未定



でこ／戸次公明

人聖鸞親祖宗 い集の日命ご

毎月（三月から九月まで）二十八日

午後二時より三時まで